

この国はどうへ
行こうとしているのか

東日本大震災 5年

東京郊外にある料理店で待つと、窓越しに作家、辺見庸さん(71)の姿が見えた。前回の取材から3年。脳出血によるまひで、右手をみぞおちのあたりに持ち上げたままの姿勢は変わっていないが、足元を見ながら歩くリズムは幾分遅くなったようだ。

辺見さんとのやり取りは常に刺激に満ちている。だから、席に着くなり「震災から間もなく5年になりますが、それに絡めたお話を」とお願いした。

「3・11を単なる自然災害と決めつけてしまうのはいけないんじゃないかな。東日本大震災は戦争経験に近いものだと思う。それまで、戦後の日常で露出してこなかったもの、むき出しになってはいけないものが、はしなへも出てきてしまった瞬間というのか。例えば、カメラマンがどう隠そうにも、フレイムのはしほしに出てしまう死体の映像がそうだよ」

5年前。大津波に襲われた直後の東北沿岸部は爆撃を受けたような状態だった。辺見さんは

美談で隠す「戦争」体験

続ける。「米軍の支援活動や、アメリカの駐日大使や天皇が被災者を慰問している映像を見ると、震災は戦時的なイメージととらえたほうが分かりやすい。まさに戦争状況なんです」

辺見さんが生まれ育った宮城・石巻の町の風景も大津波が奪った。メディアは定点観測で時の流れを表そうとするが、辺見さんは上辺だけの表現を嫌う。「テレビのクルーも独創的な特集を作ろうなんて発想ないよ。何周年って言うては被災地に入って、定食屋の弁当みたいに同じ物を作っている」。そんな考えもあり、震災を軽々しく語ってこなかった。

東京電力福島第一原発事故についても、こう見ている。

「チャイナシンドローム(炉心溶融)、いや、核爆発のイメージだね。まさに戦時だと思っけど、政府はこうした空気をうまく利用している。安倍晋三政権が憲法9条の改正よりも先に、憲法に緊急事態条項が必要だと言いついたのは、例外状態を作り基本的人権を制限したいから。まさに3・11と今後起きるだろう巨大地震を、単なる災害ではなく戦争と同等にとらえ、言論統制を恒常化しようとしている。一方、民衆は強い指導者を求めようとする。現政権は大衆の移り気と大勢順応的メディアの習性を熟知している。戦後民主主義のメッキが剥がれて、またぞろ全体主義的な実相がむき出しになってきている。北朝鮮がもし日本にミサイルでもぶっ飛ばせば、愛国心が



一気に強まり、日本の政治状況は今よりもっと翼賛化するでしょう。政府は震災をテコに、あるいは利用して、この国を変えようとしていると言っただろうか。

話が一段落したころ、辺見さんはさりげない感じで切り出した。「僕もあと1、2年の命だと思っから……」

従順、調和重視…国民性利用する政府

復興記念公園の整備を計画している宮城県石巻市の南浜地区。大津波は沿岸部を破壊し尽くした。2015年12月20日、本社ヘリから佐々木順一撮影

05年には大腸がんが見つかり、外科手術や放射線治療を受けてきた。「これが最後だ」という思いから出た言葉なのか。

病と闘いながら00年代から「ファシズム」という言葉を鍵に、日本の状況をあぶり出してきた。今月19日に亡くなったイタリアの作家、ウンベルト・エーコ氏を引用しながら説く現代のファシズムを次のように短く要約してみた。

第二次大戦で独伊の独裁者が突き動かした全体主義のようなあからさまな抑圧ではない。責任を負う中核も本質もはっきりせず、市民一人一人の内面に癖や如世という形ではびこる。メディアの自粛や、権威や他者を異常に気にするそんなく、奇妙なムード」へりがその典型ー。

辺見さんは震災後の日本にそれを感している。

「みんな『花は咲く』を歌って、なんとなくまとまる気持ち悪さ。この前、日本人をたたえるNHKの番組を見ていたら、『ニッポンすごい』もこ

「サムライ」や「なでしこ」といったイメージをかぶせ、正直で勤勉で調和を重んじる「美しい日本」を自らうたう社会。日本人の持ち味と言われる従順、恥の感覚をこきさら強調するムードが、辺見さんは嫌いなのだ。

「原発事故の責任をあやふやにしたまま、『花は咲く』で覆い隠すかのように原発も武器も輸出する。3・11の時に予感した以上のが5年後にはっきり起きています。予感以上の進行速度で。原子力行政の責任や罪が問われないまま、原発を再稼働させて先に進もうとする政治、社会を批判する。

「忘れたふりにたけている」

「ヘイトスピーチなど排外的なムードもここ5年で急速に目立ち始めた。排外姿勢や原発輸出は安倍内閣だけでなく世論が許している。あえて短絡的に言えば、戦争を起すのはたやすく、戦争とは呼ばなくても、局地戦は簡単に起きる。なあ、と」

辺見さんは新刊「1★9★3★7」で、日本軍が南京大虐殺を起した年に焦点を当て、日本人の内面に共存する「獣性と慈愛」を探ろうとした。「1937年7月、日本が中国侵略を本格化したあの時、誰も戦争だなんて思わず、国民はのんきに暮らしていた。震災5年の状況もどうしてもそこに重なってしまっ」

執筆には個人的な動機もあった。中国に出征し、戦後、母に言わせれば「お化け」のように人が変わった父の内面にわけ入り、自分をも含めた日本人を考えたかった。

父は、訪ねてきたかつての上旨に真剣な表情で敬礼してみせた。子供の空気銃でスズメを1発で撃ち落とした時の恐ろしい目。暇があればパチンコ台に向かい、抜け殻のようになっていた姿……。

中国人を殺したのか。それを聞き出せないまま父は逝ったが、「長く、父親がしたこと自分の問題として考える意欲に欠けていた」。その思いが震災後に湧いてきた。

「僕は中国で長年特派員をしていましたが、自分は父親とは何も関係なく、何も受け継がず、忘却する権利があると思っていた。ところが先が長くないと思ひ始め、今の世の中の状況を自らすると、やけに気になる。自分で『自らの記憶に決着をつけたい』という思いで、取りつかれたように本を書き始めた。基本的な事実を知らないだけでなく、知ろうともしていなかった自分に、びっくりしたんです」

「おぼろげと父のいた過去を覗く。すると、かれの記憶の川が、知らず知らず、また生きてある私の記憶の伏流にながれこんでくる気がしてくる」(「1★9★3★7」)

多くの文献、資料に当たるうち、元兵士の証言から浮かぶ情景が辺見さんの頭から離れなくなる。「原野で兵士2人が、別々に中国人女性を犯しながら互

いに手を振り合う。その様子を見ながら行軍している兵隊たちが小銃を振り上げ「がんばれ!」と言ってげらげら笑っている。でも、彼らに犯罪意識はなかった。天皇制軍国主義がもたらした、すさまじい負のイメージを感じる。

戦後の日本人は忘れっぽいとよく聞かすが、辺見さんの見方は違う。「忘れたふりをして昔を残しておく。そのせりに非常にたけている。過去の過ちも責任もあいまいにして、忘れたふりをするには、鉛のような無神経が必要。それが日本人の意識の底にずっとあると思う」

震災で現れた「むき出しの日本」。原発事故で今も約10万人の避難者がいるのに、責任がいまいいな状況を許すこの国の姿と、日中戦争での皇軍の姿が辺見さんの中につながる。戦争被害者が被災者に重なるという点ではない。自らの行いを深く自問せず、さしたる葛藤もなくやり過ごすところが、今の日本人につながる、と。

時空を超え、連続と続く自分たち自身の危うさを知れ。辺見さんの語りには、そんな提言が込められているように思える。

作家 辺見 庸さん



へんみ・よう 1944年宮城県石巻市生まれ。共同通信記者を経て52歳で独立。小説「自動起床装置」で芥川賞受賞。精力的に執筆活動を続け、小説、ノンフィクションの著書多数。最新刊は「増補版1★9★3★7(イクミナ)」(河出書房新社)。—竹内幹撮影